

機関番号：

研究種目：基盤研究[◎]

研究期間：2005～2010

課題番号：17592323

研究課題名（和文）地域で生活する知的障害児・者の性に対する看護・福祉協働支援

研究課題名（英文）Cooperative Support in Nursing-Care/Welfare Services to Sexual Behavior of Intellectually Disabled persons Living in Local Communities

研究代表者

槌谷亜希子 (TSUCHIYA AKIKO)

研究者番号：00285545

研究成果の概要（和文）：

地域で生活する知的障害児・者の性に対する看護・福祉協働支援として、ピアカウンセリング実践を実施、評価することを目的に、思春期を対象としたピアカウンセリングを実施・評価した後、知的障害児・者の性支援について支援員を対象に調査を行い、結果を分析した。その結果、支援員は、知的障害児・者の性行動に対して、場面や状況に合わせた支援を行っており、性支援として、「知的障害児・者への性教育」を重要視していた。本研究では、知的障害児・者へのピアカウンセリング実践には至らなかったが、知的障害児・者の性支援は、看護師が支援員と連携し、対象者に起こっている性行動や状況を見極めた上で支援方法を検討する必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed at conducting and evaluating peer counseling for intellectually disabled persons living in local communities. The peer counseling, which focuses on sexual activity, was meant to be implemented as part of a cooperative support program of nursing-care and welfare services. First, peer counseling was provided to adolescent children, and the counseling was evaluated. Then a study was conducted of care support specialists regarding the support they gave to intellectually disabled persons regarding sexual activity. It was found that those specialists provided support to intellectually disabled persons as they encountered problems regarding sexual activity and as the situation demanded. It was also shown that the care support specialists regarded sex education for intellectually disabled persons as the most important means of supporting their sexual activity. Although peer counseling for intellectually disabled persons was not implemented within the scope of this study, it was indicated that nurses and care support specialists need to work together in assessing the circumstances and sexual behaviors of those needing support before specific means of support can be determined.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,200,000	0	1,200,000
2006年度			留保
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度			留保
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,800,000	480,000	3,280,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：

1. 研究開始当初の背景

知的障害児・者が地域生活を送る上で重要な要素の一つに、性の自己決定がある。支援費制度の導入により、地域生活を送る上で必要なサービスを知的障害児・者自身が選択し決定するという、当事者主体の支援体制が整備されつつある。しかし、地域生活を送る上で重要と思われる「性」に関する支援は、制度やサービスとして確立されたものはない。知的障害児・者は、抽象的思考能力、認知学習能力が脆弱であるという特徴がある。従って、性に関する支援を行う場合、本人の興味・関心が芽生えた適切な時期に、理解度を確認しながら、個別的な対応を行うことが重要である。本研究は、個人差が大きい知的障害児・者の自立支援を目標とし、ピアカウンセリングを取り入れることで、性に関する有効な支援方法の開発を目指すものである。

2. 研究の目的

地域で生活する知的障害者の性に対する看護・福祉協働支援として、ピアカウンセリング実践を実施、評価することである。

- (1) ピアカウンセリング実践に必要な構成要素を明らかにする。
- (2) 思春期を対象としたピアカウンセリングを、当別町との連携により実施・評価する。
- (3) 知的障害のある思春期に対する性支援の実態とピアカウンセリング実践に対するニーズを明らかにし、ピアカウンセリング実践プログラムを作成する。
- (4) 知的障害のある思春期を対象としたピアカウンセリングを実施・評価し、地域で生活する知的障害者の性に対する看護・福祉協働支援について考察する。

3. 研究の方法

- (1) 関連文献および国内外のピアカウンセリング実践機関の情報収集と検討により、質問紙の原案を作成、プレテストを行い、高校生および高校教員を対象に「性に対する考えの現状」を調査し結果を分析する。
- (2) 一般思春期を対象としたピアカウンセ

リング実践に向けての事業計画を立案、実施、評価し、結果を分析する。

(3) 知的障害のある思春期に対する性支援の実態とピアカウンセリング実践に対するニーズを調査し、結果を分析する。

(4) (1)～(3)の研究成果を基に、知的障害のある思春期を対象としたピアカウンセリングを実施・評価する。

4. 研究成果

(1) 高校教員は、高校生の性の現状について、「性行動の低年齢化」、「性感染症の増加」、「性情報の多様化」などを問題視していること、高校生から性の相談を受ける機会は少ないが、「対応に自信がない」、「時間がかかる」などの理由から「相談を受けたくない」、「どちらともいえない」と考えていること、性教育の実施者として、「両親（母親、父親）」が適任と考えていることなどが明らかとなった。また、高校生の性に対する考えの現状としては、高校生の性の現状について問題視していない傾向があること、高校生から性に関する相談を受けた経験がある者の多くは、「知識がない」、「なんと答えたらよいかわからない」等の理由で「相談を受けたい」とは考えていないこと、学校の性教育は「役立つ」と感じていること、性教育の実施者は「医療従事者」が適任と考えていることなどが明らかとなった。

(2) 札幌市内の中学校1校の協力を得て、中学3年生の女子56名を対象に、ピアカウンセリング実践を行った。内容は、「疾病予防(性感染症)と母性保護」と題し、ラポールゲーム(ピアカウンセラーと中学生の交流)、性感染症に関するレクチャー、性感染症に関するグループワークと発表などを中心とした。結果、「ピアカウンセリングは必要」と回答した受講生が約9割、「性感染症を身近に感じた」、「自分の意見が言えるようになった」と回答した受講生が約9割であった。実施時期(中学3年生)は、「ちょうどよい」が約6

割と最も多かったが、「遅い」とした者が3割いたことから、今後、実施内容と合わせて検討する必要性が示唆された。

(3) 質問紙は100名へ配布、77名より回収した（回収率77%）。結果、対象者の基本属性は、性別は男女がほぼ半数ずつ、平均年齢は37.6歳、平均勤務年数は7.2年で、勤務先は通所施設と入所施設が主であった。支援員が関わった知的障害児・者の性行動は、「異性への過度な接触（触る、抱きつく）」が最も多かった。施設内で性行動に遭遇した場合の対応は、性行動の種類や人目に付く場所かどうかにより差が見られた。知的障害児・者への性支援として、支援員は「知的障害児・者への性教育」、「利用者本人と支援員との情報交換」、「支援員同士の情報交換」を重要視していた。また、性支援を行うべき人材としては「支援員」が最も多かった。以上のことから、支援員は、知的障害児・者の性行動に遭遇する機会が多く、知的障害児・者の性支援について重要視していることがうかがえた。

(4) 研究途中で研究代表者が異動したことに伴い、本研究の最終目的である、知的障害児・者に対するピアカウンセリング実践には至らなかった。これまでの研究成果を基礎資料として、知的障害児・者の性支援の整備について、検討を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①松島（藤井）可苗、槌谷亜希子、篠木絵理、高校生の性に対する考えの現状、査読無、北海道母性衛生学会会報 第35号、2006、P10-12.
- ②槌谷亜希子、篠木絵理、松島（藤井）可苗、横井寿之、阿保順子、中学生を対象とした思春期ピアカウンセリング、北海道医療大学看護福祉学部紀要、査読無、15号、2008、P59-64.
- ③槌谷亜希子、篠木絵理、藤井可苗、阿保順子、横井寿之、高校生の性と性教育に対す

る教員の意識、北海道医療大学看護福祉学部紀要、査読無、16号、2009、P69-72.

〔学会発表〕（計2件）

- ①槌谷亜希子、篠木絵理、松島（藤井）可苗、阿保順子、横井寿之、高校生の性と性教育に対する高校教員の意識、北海道医療大学看護福祉学部学会 第2回学術大会、2005年9月、北海道.
- ②松島（藤井）可苗、槌谷亜希子、篠木絵理、高校生の性に対する考えの現状、第35回北海道母性衛生学会、2006年10月、北海道.

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

槌谷亜希子 (TSUCHIYA AKIKO)
東京医療保健大学・医療保健学部・講師
研究者番号：00285545

(2) 研究分担者

篠木絵理 (SHINOKI ERI)
東京医療保健大学・医療保健学部・教授
研究者番号：00275497

藤井可苗 (FUJII KAE)
関西福祉大学・看護学部・講師

研究者番号：90382506

阿保順子 (ABO JYUNKO)
長野県立看護大学・教授
研究者番号：30265095

(3)連携研究者

研究者番号：